

北^{ほく}辰^{しん} 斜^{ななめ}に さすところ

伝えたい志がある。
残したい想いがある。



三國連太郎 緒形直人 林隆三 佐々木愛

和田光司(新人) 林征生(新人) 笹村浩介(特別出演) 清水美那 大西麻恵 波岡一喜
神山繁 北村和夫 織本順吉 佐々木すみ江 鈴木瑞穂 犬塚弘 滝田裕介 土屋嘉男
樋浦勉 三遊亭歌之介 高橋長英 斉藤とも子 河原崎建三 永島敏行 坂上三郎

ナレーター・山本圭

監督:神山征二郎

製作:廣田 稔/神山征二郎

原作:室積 光(小学館刊「記念試合」)

脚本:室積 光/神山征二郎

音楽:和田 薫 撮影:伊藤嘉宏

美術:春木 章 照明:渡辺雄二

録音:武 進 編集:蛸田智子

プロデューサー:鈴木トシ子/森 太郎

助監督:日垣一博

製作担当:曾根晋 監督補:神山兼三

製作総務:加藤伸代

製作:映画「北辰斜にさすところ」製作委員会

神山プロダクション

協賛:日本航空 JAL 支援:文化庁

宣伝:ライオンカンパニー

配給:東京テアトル

<http://www.hokushin-naname.jp/>

2007年/日本/111分/カラー

ビスタサイズ/DTSステレオ

©2007映画「北辰斜にさすところ」製作委員会



あの熱き日々、決して忘れない…。
激動の昭和を生きぬいた青春の輝き。

名匠・神山征二郎が旧制高校生たちの半生を描く。

かつて日本には、明治時代に生まれた旧制高等学校という教育機関があった。そこは、伝統のなかで学問を学ぶと同時に、狭き門をくぐり抜けた若きエリートたちが切磋琢磨しながら人格を形成する場所でもあった。

寮での共同生活と名物教授。白線帽と黒マント、そして高下駄の蜜カラファッション。寮歌にストロム記念祭…。

旧制高校には、豊かな自由があった。純真な理念と、偽善や虚飾を排する誇り高き精神があった。それは「学歴」という功利性でしか教育制度を計ろうとしない現代社会において、もつとも見つめ直す必要があるものではないだろうか。

そして旧制高校で育まれた絆を無情にも引き裂いた、あの戦争。多くの友情が多くの若き魂が、燃えさかる戦火の中に虚しく潰えていった…。

敗戦後の教育改革によって、旧制高校の制度が廃止されてから半世紀。それでも、あの熱きロマンチ

ズムと戦争の傷跡は語りつづられ、いまでも忘れ去れることはない。

『北辰斜にさすところ』は、戦禍による永遠の別を挟みながらも、旧制高校で学んだ学友たちの在りし日と現在の姿が交互に描かれる骨太な群像ドラマである。50余年の歳月を経て、旧制高校生たちの奔放な青春の躍動がスクリーンに甦る!!

監督は「ハチ公物語」(87)「遠き落日」(92)「大河の一滴」(01)「草の乱」(04)などで知られるベテラン神山征二郎。本作は記念すべき監督作25本目となるが、そのうちの13本が戦争に関係する題材という筋金入りの反戦派監督である。

主役である上田勝弥を演じるのは、自身も中国への出征経験を持つ三國連太郎。彼が所属した部隊の総数は千数百人だったが、前線から戻り再び祖国の土を踏めたのは数十人だったという。いまや名実ともに日本を代表する名優が、亡き友への深い思いを込めて熱演する。

若き日の勝弥の先輩であり、七高の名物男としてその名を轟かせた草野正吾には、緒形直人。聲あ破帽な旧制高校生ぶりが見ものだ。

また、林隆三とその息子・林征生が親子役で初共演しているのも話題のひとつ。そして、惜しくも逝去した名優・北村和夫をはじめ、佐々木愛、坂上三郎、神山繁、織本順吉、佐々木すみ江、鈴木瑞穂など日本映画界を支えてきたベテラン俳優陣が顔を揃える。

本作は、弁護士・廣田稔が発起人となった「映画『北辰斜にさすところ』製作委員会」が中心となり、この映画化に賛同し支援する多くの人々の出資金・協賛金によって製作された。

いま、日本人が振りかえらなければならない歴史とは何か。そこから、何を学ぶべきなのか。『北辰斜にさすところ』は、あらゆる世代に向けてそれを問いかける。



「天才的な馬鹿になれば、馬鹿の天才になれば!」
あの破天荒な先輩は、そう論してくれた。
旧制高校。その思い出は、いまでも尽きない…。

【物語】

昭和11年に旧制第七高等学校造士館(現・鹿児島大学)へ入学した上田勝弥(三國連太郎)は、人生の晩節を迎えていた。七高では、破天荒な先輩、草野正吾(緒形直人)と出会い、また野球部のエースとして鳴らした勝弥は九州帝国大学に進んで医学を学び、戦時中は軍医として南方戦線に従軍した。戦後は東京郊外で開業医を務めていたが、今では息子の勝弘(林隆三)に代を譲り、高校生の孫・勝男(林征生)が甲子園に出場するのを楽しみにしている悠々自適の身だった。そんな勝弥だが、七高同窓会への出席は常に拒んでいた。

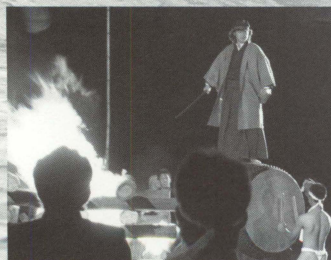
一方、来年は七高の野球部創部百年を記念して、因縁の五高(現・熊本大学)との記念試合が行われる予定となっていた。しかし、その連絡にも「すまんが欠席させてもらう。皆さんによろしく」と答える勝弥。実行委員会の幹事たちは、その言葉が納得できない。

戦後60年、七高で青春の日々を過ごした鹿児島にも、生れ故郷である熊本の人吉にも足を向けようとし、勝弥。そこには、戦場での悔恨と慚愧という深く重い理由があった…。



心に沁みるいい映画を観た。
この映画から学ぶものはたくさんあります。感激しました。

日野原重明(聖路加国際病院名誉院長・同理事長)



「北辰斜に」とは

旧制高等学校とは現在の大学にあたる教育機関であり、明治新政府が社会のリーダーを養成する目的で作った学校制度だった。卒業生は帝国大学へ進学できる原則のため、厳しい受験競争によって選別されて、入学がかなうのは同世代の青少年男子の1%にも満たなかったという。

本作の題名「北辰斜にさすところ」は、映画の舞台となる鹿児島・七高造士館の寮歌に由来している。「北辰」とは北極星のことであり、鹿児島市内からは北天の仰角31.36°に北極星を臨むことができる。日々は流れ、時代は変転しても星の位置は変わらない。

12月お正月ロードショー

全国順次
公開予定

特別鑑賞券1,500円(税込)絶賛発売中!(当日一般1,800円のところ)

劇場窓口でお買い求めの方には特製ポストカードをプレゼント(数量限定)

歌舞伎町シネシティ TOKYU MILANOビル

シネマスクエア
とうきゅう

03(3202)1189

